

機関番号：82620

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20520150

研究課題名 (和文) 古楽器の形態変化及びジャンル間の交流に関する総合研究

研究課題名 (英文) Investigation of Traditional Japanese Musical Instruments :
Changes Their Shapes according to Genres

研究代表者

高桑 いづみ (TAKAKUWA IZUMI)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・無形文化財研究室長

研究者番号：60249919

研究成果の概要 (和文)：雅楽で用いる龍笛と能で用いる能管は形が似ており、龍笛から能管が派生した、という巷説が通行しているが、X線透過撮影の結果、そのような事例は認めにくいことが判明した。また、桃山時代に渡来した三味線はさまざまな江戸音曲で用いられているが、古三味線は概して細身であることが、実地調査により判明した。

研究成果の概要 (英文)： The shape of *nokan* (a transverse flute used in *no*) and that of *ryuteki* (a transverse flute used in *gagaku*) resemble. So it has been said that *nokan* developed from *ryuteki*. But it seems difficult to clarify this view according to investigation by radiography. Another example is that of *shamisen* imported from Asia which has been used in many genres of music. It is clarified that old *shamisen* was slimmer than present ones.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：日本音楽・楽器・龍笛・能管・三味線・短箏・胡弓

1. 研究開始当初の背景

音楽学では文献資料や楽譜を中心として研究がおこなわれているが、音楽の大きな部分を担う楽器は、古くからさまざまな種類が用いられ、各地の寺社や博物館にその多くが保存されているにもかかわらず、実地調査が困難なことから等閑視されてきた。研究代表者は、有形文化財の研究者や美術館・博物館と連携のとりやすい職場環境を利用して、これまで鼓胴や琵琶などを中心に楽器の調査を行ってきたが、能管と龍笛、三味線につい

てはほとんど手つかずの状態である。能管と龍笛については、国立歴史民俗博物館で小島美子氏 (同博物館名誉教授) を中心とするグループが紀州徳川家旧蔵楽器についてX線透過撮影を行って成果を発表しているが、X線データの読み取りに誤りが多く、実際に楽器製作に関わる関係者から疑問の声がでていた。また三味線については、蒲生郷昭氏 (東京文化財研究所名誉研究員) によって絵画資料に基づく古三味線の研究が行われ、大きな成果をあげているが、具体的な古楽器調査は

行われてこなかった。従って、絵画資料の信憑性が立証されたわけではない。

2. 研究の目的

古楽器の中には、現在使用されている楽器とは形態のことなるもの、形態が確立する以前のものも少なくない。また、時代の変遷に伴って、楽器の形態が変化し、さまざまなジャンルに供されることも多い。

たとえば、外見が酷似していることから、龍笛から能管が派生したという言説が通行している。雅楽で用いる龍笛と能管は、外見が近いことから龍笛から能管が派生したという巷説が解かれることが多い。龍笛が破損して修理した際に内部にホゾを入れたことがキッカケだ、などまことしやかに説かれているのだが、想像の域を出ない推論である。本研究ではX線透過撮影をおこない、龍笛と能管の内部を比較して、修理・派生説の真偽を明らかにすることを、第1の目的としている。能管の名器については、明和年間に徳川幕府に提出された『七十種銘管録』が夙に知られている。笛の銘と作者、所蔵者の名を記した記録で、森田光春編『森田流奥義録』に表のかたちでまとまっているが、作者の信憑性、作風の違いなど未だ検討されることがない。『銘管録』の記事がどこまで信頼できるのか、それについてもあわせて検討する。

また、桃山時代に渡来した三味線は江戸時代の音曲の中心的な位置を占める楽器である。現在では長唄に用いる細棹、義太夫で用いる太棹、その中間的な細さを持つ豊後浄瑠璃系の三味線など大まかな分類がおこなわれているが、それぞれの音曲に応じて楽器の細部に工夫がなされてきた。絵画資料などを見るとかつては現在より棹が細く、バチの形態も異なっている。そもそもジャンルによる細部の変化はいつ頃から始まったのか、綾杉などの工夫はいつからおこなうようになったのか、継棹と棹の細さの関係はあるのか、などいくつかの点に着目しながら三味線の変遷過程の解明を第2の目的とする。

その他、これまであまり注目されていなかった短箏及び胡弓についても調査を行う。

3. 研究の方法

各地の博物館や教育委員会から入手したデータに基づき、当該楽器について実地調査を行う。楽器の法量を細かく計測して他の楽器と比較し、熟覧により製作方法を探り、笛に関してはX線透過撮影をおこなって、内部の構造、製法を解明する。X線透過撮影は過去にもおこなわれたが、データの読み取りが不正確であった。今回は、笛製作者が調査に参加し、製作者の立場からの助言を参考にしながら、内部構造の把握につとめる。

4. 研究成果

(1) 彦根城博物館所蔵の龍笛を中心に21管を調査した。X線透過撮影の結果、龍笛の修理から能管が派生した、という巷説を示唆するような笛は発見できなかった。広島県福山市鞆の浦安国寺の仏像胎内に納入された笛は、仏像の造立時期から判断して鎌倉時代に製作されたことが確実な笛だが、頭端から一材であったばかりか、竹の節を抜いていないこともX線透過撮影で判明した。製作年代の限定できる笛は少ないので、この工法は古作のひとつの軌範となる。

彦根城博物館は、古管から江戸時代の新作まで幅広く蔵している。本研究では新旧とりまぜて調査をおこなったが、工法に大きな違いが認められなかった。頭部の姿を太く見せるために別材を接ぐ工法は比較的早い段階から見られるが、平安・鎌倉時代の製作という伝えがある笛や、古管と神田大和介（江戸時代後期の楽器商・鑑定家）が鑑定した笛の多くは、頭端から管尻まで一材で成形されていた。歌口から第1指孔の間（以下「息袋」と呼ぶ）を切断して別材で接いでいる笛は3点とごく少数で、劣化の著しい笛でも息袋はそのままであった。息袋は、発音に影響を及ぼす大事な部分である。よほど大きな亀裂がない限り、大事な部分を切断することはなかった、と言ってよかろう。しかも接ぐときは内径が変わらぬよう精巧に接いでいる。継ぎ損なった結果能管が誕生したという推理は、現状を見る限りむずかしいと判断した。巷説を再考する必要がある。

また、歌口の裏側にはセミと賞する部分がある。発音にはまったく関係のない箇所だが、セミの形状を工夫している笛が多いことも判明した。通常形状をとるのは21管中9管しかなく、9管の中には後補の可能性も含まれる。正倉院には小枝を残す笛が伝世しているが、それを意識したようである。古典をひもとくと、『源平盛衰記』に載る「蟬折」は竹の節が蟬の形に似ていた、と書かれているし、『続教訓抄』では「チイサヤカナル笛ノ蟬三筋アザアザトシテ付」いた「小蟬丸」や「昔蟬ニ碧鮮ノ二葉アリ、白露常ニ其上ニ凝る、故ニ青葉ト号」した笛を紹介している。小枝がついた姿をセミを呼んだようで、なかにはまさにその姿を模した笛もあった。枝を払っただけ、すなわち蟬折れ状態の笛は数多く、わざわざ蟬折れ状態に成形した別材をはめこんだり、セミのそばに虫食い風の孔をあけるなど、自然の素材としての竹への愛着が笛にも反映していることが

判明した。

(2) 能管については、博物館・能楽囃子方の所蔵する 41 管を調査した。能管の特徴は、歌口と第 1 指孔の間を切断して別材を挿入し、その部分の内径を狭めている点である。その別材をノドと呼んでいるが、この細工のために音律は不安定になるが、能管固有の鋭い音色が出るようになっていく。X 線透過撮影の結果、ノドの厚さと絞り方、ノドの挿入の仕方が、時代とともに変化した可能性がある、という推論に至った。肉厚で中央をしぼったノドから、肉が薄く中央を絞らず平坦なノドへ、息袋の両端を切断して挿入する工法から中央寄りを切断する工法へ、切断箇所を 2 箇所から 1 箇所へ減らす工法へ、という流れである。ノドが肉厚で中央を絞ったタイプの笛は、桃山時代の武将の愛用と伝えられるものに多く見られる一方で、切断箇所が 1 つで平坦で薄いノドを持つ管は劣化が少なく、江戸時代後期以降の新作と見られるものが多かった。ノドの中央を絞るタイプから平坦なタイプへ、という流れは、吹奏しやすさとも関係があるだろう。江戸中期の笛作者法橋の作とされている笛を X 線写真で見ると、ノドが細長かった。平凡社刊『音楽事典』では「ノドが長すぎると最高音のヒシギが出しにくく」と記述しているが、それに呼応するのが興味深い。作者によってノドの形状や製作工程に違いがあるのか、『七十種銘管録』の信憑性は高いのか、といった問題について、今回調査した限りでは結論を導くまでには至らなかったが、龍笛の古管、能管の古管を確認し、工法の流れを見いだした意義は大きい。

龍笛では息袋の両端をほんの少し絞って中央をふくらませる。中央を狭める能管のノドの挿入はその正反対の発想である。修理から能管が派生したという推理は、楽器の繊細な構造を無視したあまりに安直なものであろう。能管のノドは、古い時代の笛ほど肉厚でなめらかなラインを有していた。これは、修理で挿入した別材の内径がたまたま狭かった、というレベルから派生したとは考えにくい。はるかに高い技術を示している。民間芸能であった猿樂が当初からもっていた音感、音色への嗜好を、龍笛を模した笛で再現しようとしたとき、さまざまに工夫する中で誕生したのがノドであった、と結論づけたい。

(3) 三味線については、28 挺の調査を行った。1 挺ずつ異なり、用いられたジャンルが不明のものもあったが、確実に江戸時代の

製作と限定できる三味線 9 挺を現行と比較すると、棹が細い例、胴が小さい例、サワリ山という噪音発生のための工夫がない例、サワリ谷がない例、サワリ山が現行とは異なる箇所についている例、上駒に総ての糸を乗せている例、糸巻きが細い例、I と III の糸巻きがかなり斜めに糸蔵に挿入されている例、棹や胴に朱入れのある例、胴の中央に年輪の中心を位置させない例、根尾に房が付く例、三折れよりも多くに分解できる例などがあった。これらが個体差、時代差、地域差、種目差のいずれなのかは、さまざまな角度から検討する必要がある。

(4) 点数は少ないが、通常よりも全長の短い短箏と胡弓についても調査を行った。

短箏は、幼年者や女性が弾きやすいように、旅行に持参しやすいように、また牛車など狭い場所に持ち込んで弾けるように、等々さまざまな理由から製作されたが、それゆえに形態はさまざまである。しかし、小形とはいっても弾きやすさと音高を考慮し、全長が 100 センチより短くならず、幅も標準タイプと同じく 25 センチ前後であることが判明した。

胡弓は 4 例調査したが、すべて現行よりも全長が短く、棹の幅も狭く、胴も小さいことが判明した。

短箏、胡弓は調査例が少ないので、今後調査例をふやしてさらに考察を進めたい。

いずれの楽器も限られた年限で調査できた例は少ない。さらに調査例をふやすことで、日本人が楽器に抱いていたイメージ、慣れ親しんできた音色への工学的な工夫などが明らかになっていくであろう。音は、日常の意識にはのぼりにくいが、文化や生活の基底として欠くことのできないものである。楽器の調査を通して日本人の音文化を明らかにする意義は少なくない。本研究はその解明のための一歩である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1. 高桑いづみ「野村美術館蔵の能管」『研究紀要』第 20 号 野村美術館発行 依頼原稿 2011.3 119-132

2. 野川美穂子「日本音楽における「ノイズ」」『文学』岩波書店 2010 年 12 月号 依頼原稿 2010.12 107-121

3. 高桑いづみ「X 線透過撮影による能管・龍笛の構造解明」『無形文化遺産研究報告』第 3 号 東京文化財研究所発行 査読無 2009.3 1-20

〔図書〕(計 2件)

1. 高桑いづみほか『調査報告:古楽器の形態変化及びジャンル間の交流に関する総合研究』東京文化財研究所 2011.3 132
2. 野川美穂子ほか『まるごと三味線の本』青弓社 2009.12 328

6. 研究組織

(1) 研究代表

高桑 いづみ (TAKAKUWA IZUMI)
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・無形文化財研究室長
研究者番号：60249919

(2) 研究分担者

犬塚将英 (INUZUKA MASAhide)
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・保存修復科学センター・主任研究員
研究者番号：00392548
松島朝秀 (MATSUSHIMA TOMOHIDE)
東京農工大学・科学博物館・助教
研究者番号：60533594
野川美穂子 (NOGAWA MIHOKO)
東京芸術大学・音楽学部・講師
研究者番号：50218294

(3) 研究協力者

田中敏長 (TANAKA TOSHINAGA)
笛製作者
星野厚子 (HOSHINO ATSUKO)
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・研究補佐員